

III期 古代中層

基本層序のⅢ b層を埋土とする遺構を古代中層とした。A 1、A 4、A 9～A11、C 4 地区で部分的な分布がみられる。前段階のⅡ期における分布域とやや重なる部分もあるが、土地の利用状況は異なる様相をみせる。第Ⅲ章で記述したようにⅢ層は調査区によって堆積の偏りが大きく、特にⅢ b層は不安定である。このため辛うじて検出できた遺構についても遺構埋土が極端に浅く、遺物の出土状況は確実性に乏しい。

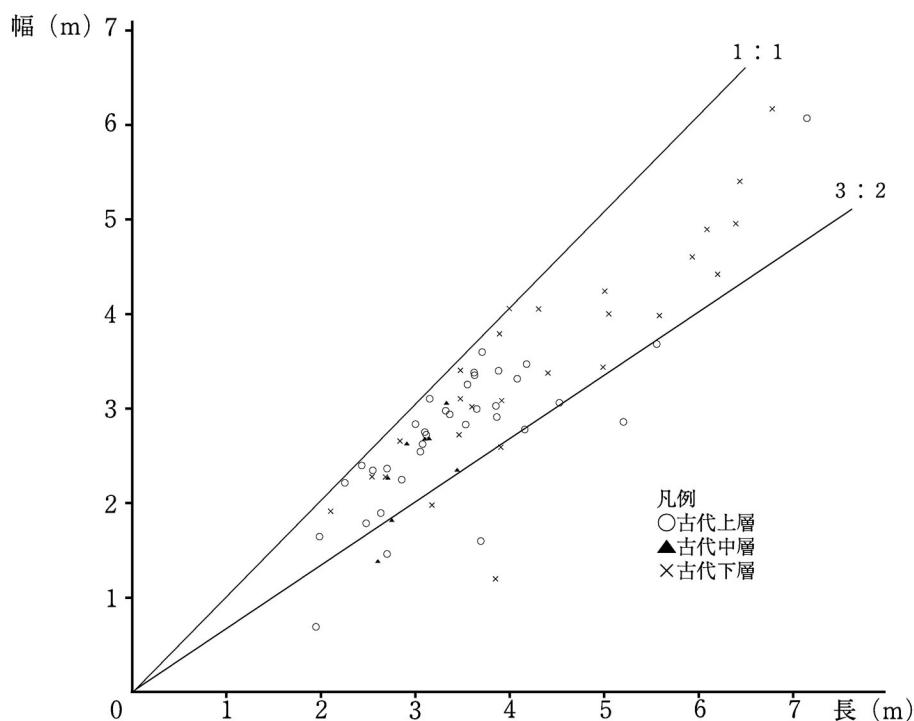
Ⅲ期の集落では竪穴建物のほか畠跡を確認した。竪穴建物は埋土が非常に浅く、ほぼ単層であり、カマドをはじめ内部施設はその痕跡をとどめるのみである。Ⅱ期の集落とは居住域の立地を変えており、A 4 地区北側に集中箇所が移る。ただし、前時期より竪穴建物数が減少していることから、A 4 地区以外の調査範囲外へと分散、移動した可能性が高い。Ⅲ期における竪穴の面積は4～10m²で、Ⅱ期に比べ小型化し、規模にまとまりがある。

畠跡は竪穴建物の集中部分からやや離れたA 9 地区で検出した。10条余りの畠間溝が約2 m間隔で平行しており、A 1 地区北端にも同様の溝が延びている。付近にも2棟の竪穴建物があるが、併存するものか定かでない。

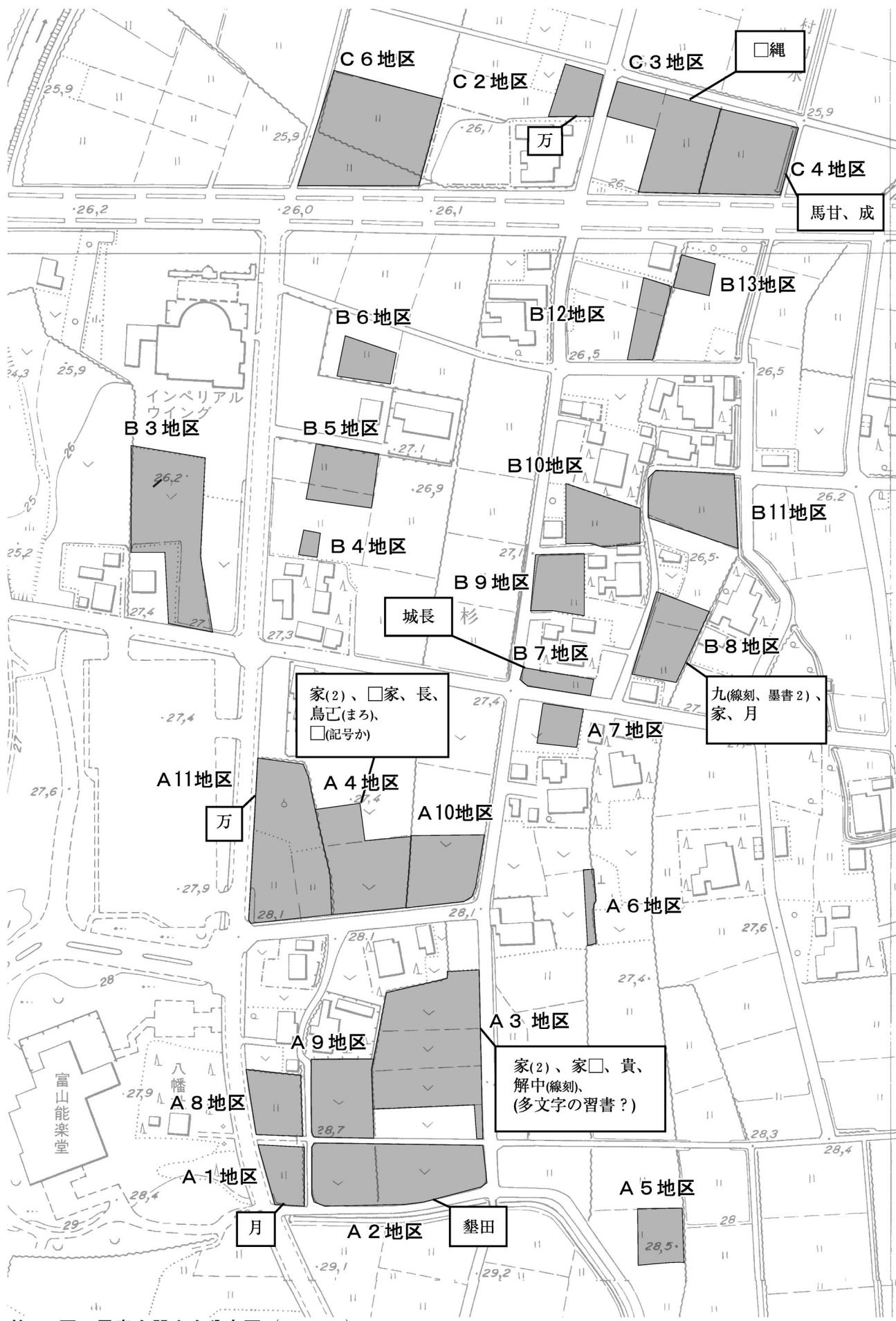
IV期 古代上層

基本層序のⅢ a層を埋土とする遺構を古代上層とした。古代では最も遺構が多く、最盛期ともいえる時期である。遺跡の北東部にあたるB 13、C 2、C 4 地区（以下、北ブロック）と、南中央部のA 1～4、A 7 地区（同、南ブロック）に分かれて竪穴建物が分布しており、特にA 4 地区では建物が継続的に集中していた状況を確認することができる。

北ブロックでは自然流路があるC 3 地区を挟んで様相がやや異なる。C 2 地区では複数棟の竪穴建物群がみられるが、これらのなかには概ね同質の遺構埋土をもつものの、出土遺物により時期が遡る



第298図 竪穴建物の規模



第299図 墨書土器出土分布図 (1:2500)

と考えられる竪穴建物が含まれる。よってC 2 地区の建物群は、Ⅱ期以降、断続的に築かれた建物を包括したものであり、同時期に併存した建物は3～4棟程度が妥当とみられる。一方、対岸のC 4、B 13地区では遺構が散漫で、継続性に欠ける。ただし、遺構および包含層からは綠釉や灰釉などの施釉陶器が散見し、B 13地区のS I 701B 13からは奈良三彩の火舎が出土するなど、希少価値の高い遺物が比較的多くみられるという特徴がある。

南ブロックはA 4 地区の中央から南側にかけて竪穴建物の密集域があり、A 3 地区北側にも竪穴建物群が展開している。なおA 3 地区南側には自然の谷状地形が入り、これより南では遺構が希薄となる。

A 4 地区の竪穴建物が密集する部分では約400m²内に30棟余の竪穴建物が重複している。竪穴の掘り込みは殆ど失われており、カマドの構築痕跡から建物の推測を重ねた部分も多い。また大半の遺物は帰属する遺構を特定できなかったが、概ねⅣ期の時期幅に収まることから、連続性をもって建物が建替えられたと推測される。A 3 地区では建物群が東西に分かれて確認でき、同時期に2群が併存していた状況が考えられる。

竪穴建物は残存状況の差が大きく、著しく重複する箇所ではカマド部分やその周辺の焼土範囲、硬化面のみをS X（不明土坑）として検出したものも多数ある。竪穴の面積は3～20m²の範囲でばらつきがあり、Ⅱ期と同様に残存の良否や構造上の問題が残る。カマドの構築位置では、一辺の中心と隅寄りとが混在しており、両者の新旧関係は明確でない。また、A 3 地区の竪穴建物には壁溝をもつものが多い。

隣接する任海宮田遺跡は周辺の古代集落の中でも墨書土器の出土量が際立って突出しており、「城長」、「家成」、「縄足」、「平」など、特定の文字を使用する集団の存在が指摘されている。友杉遺跡においても古代では墨書土器がほぼ全域から出土しており、任海宮田遺跡と共に通する文字も少量ながら出土している。A 3 、A 4 地区で比較的多く出土しているが、文字ごとのまとまりはみられない。

出土した文字では「家」が最も多く、「家」の一文字を記すものと、「家」を含めた語句や人名等を記したとみられるものとが混在している。このほか「馬甘」や「鳥^{うまかい}」^{まろ}（万呂の異体字）といった職名や人名のほか、開墾集落を裏付けるような「墾田」がある。またA 3 地区出土の土師器椀には外面全体に墨書されているものの、その文字の方向や大きさには規則性がなく、確実に判読できる文字が少ないことなどから習い書きと解釈している。

V期 中世前半（12世紀～13世紀）

前段階であるⅣ期が10世紀代に衰退し、再び生活の萌芽が確認される12世紀まで、11世紀代の痕跡は空白となる。これは周辺遺跡の調査成果とも符合し、古代前半に急増した集落は、解体から再編成への転換期を迎えている。

中世の遺構は、概ね基本層序のⅡ c 層を埋土とする。古代集落の立地が限定的であったのに対し、中世では遺跡のほぼ全域にわたって集落が展開する。ただし、年代によって集落の中心域は遷移しており、おおまかに12～13世紀代、13～14世紀代、15世紀以降の3時期で様相や立地が異なる。このうち先頭となる12～13世紀代をV期とした。

新たな時代のスタートともいえるこの時期、集落は遺跡の北東部で営まれ始める。調査区ではC 2～6、B 12、13地区にあたり、C 3 地区東の自然流路を挟んだ両岸で、掘立柱建物を中心とした遺構分布がみられる。

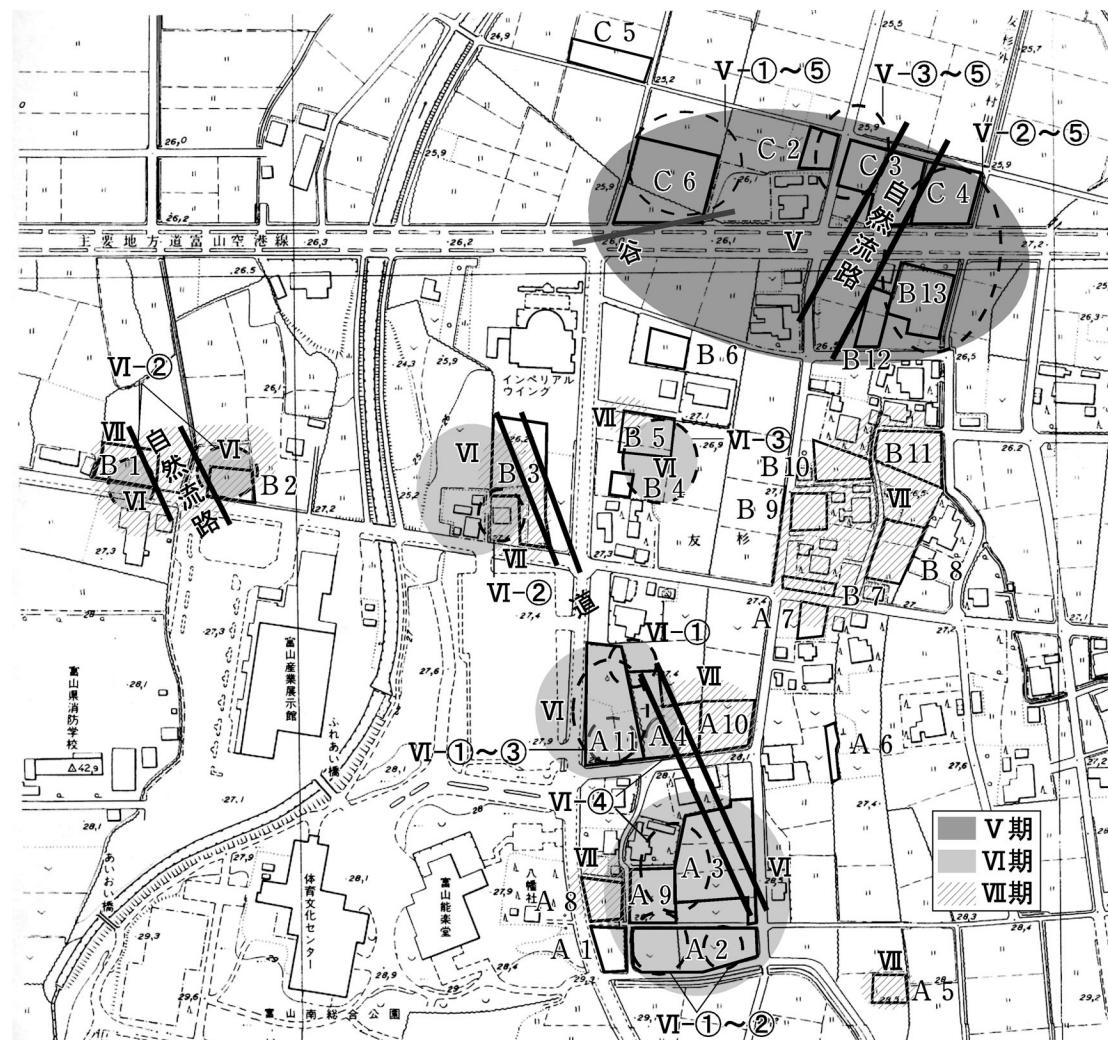
集落の変遷は、主に掘立柱建物の方位に基づいてV - ①～V - ⑤期の小期を設けた。

V - ①期は谷C 6 の形成期と相前後する頃で、建物は方位が北指向のS B 11、12、28、29が相当し、その分布範囲はC 6 地区に限られる。S B 11、28はともに桁行4間の総柱建物で、S B 11は南に後世の遺構や攪乱、用水路があるため全体像は不明確であるが、S B 28と同規模の可能性がある。この2棟は柱の年代測定結果において、建物群では最も古い年代値を示しており、谷をはじめ他の重複する遺構との切り合いからも初現的な建物と認識される。残り2棟は建物規模が異なるものの、近似した方位から同時期の併存とみられる。また、頭部を北向きに埋葬した木棺墓S K916 C 6 も同一方位をとることから同時期に属すと考えられる。この方角は宗教的な意識によるものとも考えられるが、建物との共通性から屋敷墓に近い意味をもつと推測する。

V - ②期は方位が北から東に10度前後振る建物群で、S B 26、27、30、31、38、46、53～56が相当する。V - ①期より立地範囲が拡大し、自然流路の東側C 4、B 13地区までが集落域となる。このうちS B 46、53はともに4間×4間で約100m²の規模をもつ建物であるが、南北に縦列した配置をとる。これ以降の時期にもC 4、B 13地区では、自然流路に沿った区画で集落が継続していく。

V - ③期になると自然流路の西側でも建物が造られるようになり、全体の棟数が急増している。

該当するS B 13、14、16～19、36、39～45、47、49、52、58、61、62は方位が北から15～20度前後東に振る建物で、同一場所での建替えが頻繁にみられることから、V - ③期はある程度の継続性がうかがえる。C 6 地区ではS B 16、18、19、17の順に建替えがみられ、小型柱列を伴うS B 16、18は上屋構造が異なる。



第300図 友杉遺跡V～VII期 (1:5000)

C 4 地区では S B45、44、42、41、43、40、39 の順で、徐々に柱穴規模が大型化する傾向がある。B 13 地区では S B47、51、50、49 の順に竪穴状土坑をもつ大型の建物が存続している。

V - ④期は前段階の V - ③期のなかでも、方位がより東傾する建物で、北から東へ 23~27 度振る S B33、35、37、59、60 である。自然流路の西側に 3 棟、東側では前段階から移動、南下した立地に 2 棟と、やや分散する兆候がみられる。

V - ⑤期は建物方位がさらに東向きとなり、30~35 度振る S B15、20~25、32、34、48、57 が相当し、C 6 地区中央付近および V - ④期の立地への遷移がみられる。2 間 × 2 間の建物が目立ち、前段階より建物は小型化する。また、同一場所での建替えも減少しており、C 6 地区北側で S B15、21、20 の順、南側では S B22、24、25、23 の順に変遷する。また、方位が一致する木棺墓 S K111 B12 も同時期の遺構と考えられ、S B57 の北に近接して築かれることから、より屋敷墓としての意識が強まっているようにみえる。

VI期 中世前半（13世紀～14世紀）

建物群の分布域は遺跡の南および西に拡大し、調査区では B 1、2、5 地区と A 11、3、9、2 地区に確認できる。ただし点在する調査区間には隔たりがあり、旧地形を含めた全容を把握できていはない。こうした状況を踏まえ、建物の方位に基づいた VI - ①~④ を設定した。なお、方位による区分では V 期との共通性が多く、設定した小期はむしろ集落内ブロックと換言するべきかもしれない。ただし VI 期とした集落は出土遺物から V 期より時期が若干下ると考えられるため、V 期と VI 期はある程度重なり併存しながら、段階的に変遷したものと捉えたい。

VI - ①期は建物方位が概ね北を向く段階で、東西への振れが 5 度以内に収まる。大型で北指向の縦柱建物が多い状況は V 期前半とよく似ており、一時期に併存していた可能性も否定できない。立地は遺跡南寄りの A 2、11 地区で、同一場所での建替えが頻繁にみられる。建物の重複が顕著である A 2 地区では、S D48 A 2 の区画内に 7 棟を確認した。ただし重複の著しい柱穴では切り合いが不明瞭で、個々の切り合いと建物変遷とに矛盾が生じてしまった部分があるが、全体の流れをつかむため建物方位をより重視した。この区画溝は S B105~107 に切られることから北向きの建物に先行しており、方向の合うやや西向きの建物が伴うと考えられる。区画溝内では S B102、104、117、118、溝外では S B109、113~115 が西に振る一群で、建物が東西に位置していたと考えられる。ほどなく建物方位は北から東に振るとみられ、区画溝内では S B101、103、116 が残るもの、溝が機能していたかは確実でない。S B100、105~107 は溝上とみられ、後出的である。また、東の S B110 は A 3 地区の S B96 と群を構成すると考えられる。なお、方位を共にする S K8 A 9 は同時期の墓坑と考えられる。A 11 地区では北の S B79、88 と南の S B82 が西向きの建物で、他の建物に先行して自然流路の南北に位置するが、以降は南の建物群 S B80、81、84 が展開し、北側では建物を確認していない。

VI - ②期は方位が東へ 10 度前後振る建物群で、A 2 地区では収束気味となり、A 11、B 3 地区西、および現在の荒川以西の B 1、2 地区で似た方位の一群がみられ、相前後する時期に相当すると考えられる。A 2 地区の S B111、A 11 地区では S B83、86 が前段階から継続しており、B 3 地区では S D29 B 3 に区画された S B71、72 のほか、さらに西側にも建物群が延びるようである。B 1、2 地区の建物は自然流路を挟んだ両岸に位置し、東岸の B 2 地区では S B73~76 が番号順に建替えている。最も新しい S B76 は竪穴状土坑 S K84 B 2 の上屋で、これ以前の建物とは一線を画した構造である。西岸では S B77 が単独で確認された。

2 各時期の様相

VI - ③期は東へ15~20度前後振るもので、A 11地区 S B 85とこれまで建物のなかった遺跡中央部のB 5地区 S B 63~68を確認した。継続的に建物が建てられていた遺跡南側からは遷移したとみられる。ただし棟数は少なく、同一場所での建替えも減っている。

VI - ④期は前段階からやや空隙があったとみられ、建物方位が東へ60~70度と大きく傾きを変える。これはA 3地区からA 4、B 3地区へ南北に続く道と区画を合わせたもので、A 3、4、9地区に建物が分散してみられる。A 3地区 S B 95は単独、A 4地区 S B 87、89~91、A 9地区 S B 98、99は以降の展開がない。VI期前半に比べると棟数が減少し、建物群の継続性は薄れるようである。

VII期 中世後半～近世（14世紀以降）

中世後半以降、遺跡北側を除くほぼ全域で遺構が確認されているが、中世前半の建物が未確認である遺跡東側において多数の遺構を確認した。中世後半以降はそれまでの掘立柱建物から基礎構造に変化があったとも推測でき、認識できなかったものの構造物となる遺構が含まれている可能性は高い。また15世紀以降を中世後半とすべきところだが、建物変遷からVII期の中でも後出的なものをVII期の初頭時期と考え、開始時期を遡らせている。これらはVII - 0期として包括するものとする。

このVII - 0期に属する建物は、総柱、側柱ともに柱間が不揃いである例が多く、後出的な掘立柱建物と考えられる。建物方位は北から東西にわずかに振れるものが多いものの、ばらつきが目立ち、時期差があると考えられる。

B 3地区 S B 69、70は竪穴状土坑の上屋で、VI期の建物とは場所、方位が異なる。B 1地区 S B 78は石列を伴った土坑を伴う独特の基礎構造をもつ。この3棟はほぼ北向きで、VI期以降の土坑上屋タイプともいべき一群である。A 10地区 S B 92~94、A 9地区 S B 97、A 2地区 S B 108、112は2間×2間の総柱建物で、柱間間隔や柱筋が不揃いな一群である。S B 119~122は柱穴の大型化や柱間間隔の不統一など、さらに新しい要素が多い一群としてまとめた。S B 119では建物本体の北と東に柱列が不均等に並んでおり、屋根に付属するものか、あるいは埠等の存在が想定される。

中世後半の遺構では特に井戸の重複が目立って多く、B 7~11地区では所々で密集した状況がみられた。先述したように、セットになる建物群は確認していないが、多数の井戸から中世後半の集落が遺跡東側を主体に展開したと推測する。

3 友杉遺跡の集落動態

友杉遺跡の各時期の様相から集落として把握できる古代と中世について、その有り様をまとめたい。

古代では8世紀後半代、掘立柱建物を伴う竪穴建物群が遺跡中央から南に出現し、こののち、展開していく古代集落の起点となる。遺跡北においても、別グループとみられる竪穴建物群（北ブロック）が似た時期から少数存在するようだが、中央から南のグループ（南ブロック）と比べ、建替えが少なく集中密度は低い。9世紀代に入ると南ブロックは中心を中央付近へ移し、竪穴建物が集中して建つ。一方、北ブロックは小群で点在する。

10世紀代、古代集落は途絶え、中世の胎動を聞く12世紀末まで空白期間となる。中世には集落の様相が一変、前半では同一区画内に木棺墓を伴う北方位の総柱建物群が展開し、集落域は拡大する。北を指向していた建物方位は中世半ば頃に一旦途切れるとみられ、以降は道を基にした新たな区割が設けられている。建物構造も総柱一辺倒から多様化が進み、村落景観が変化していく。

郷土史によれば中世以降において蜷川、新保、熊野、月岡など富南地域と呼称される一帯は旧寺院

の栄えた地域であり、15世紀頃には友杉地内にも極性寺、円光寺のほか数カ所の寺が存在した記録が残されている。今回の調査ではそうした旧寺院の存在を裏付けるような発見には至らなかったが、中世後半には活発な宗教活動の舞台へと変遷を辿るようである。

4 補論 出土扇について

扇の出土例はほぼ全国的にみられるが、政権都市ともいるべき平泉や鎌倉での出土が目立ち、一般集落からの出土は希有である。扇の用途については実用品や装身具以外に祭祀儀礼を担う道具のひとつと考えられており、長さ50cm余を測る今回の出土資料についても後者と推測される。

扇骨には塗料状の痕跡がみられることから、紙を貼った扇を田楽のように使用したのではないかと想像する。この扇が出土した谷C6は、柱状高台をもつ中世土師皿や多数の木製品のほか懸仏の鋳型片が共伴する遺構で、出土した種のAMS結果からAD1155~1225の年代が示されている。出土状況から、祭祀による一括廃棄とは言い切れないものの、周辺遺構ではみられない遺物の組み合わせなど、中世初頭における民衆の信仰形態をうかがう一例として重要と考える。

第21表 扇出土遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地	出土状況	年代	備考
1	柳之御所遺跡	岩手県西磐井郡平泉町	井戸からの出土が大半。4本骨の扇 完存1点のほか扇骨30本出土。	12C4/4が主体	平泉館比定地
2	加羅之御所跡（第5次）	岩手県西磐井郡平泉町	トイレ遺構から4本	12C後半	藤原秀衡・泰衡の私邸推定地。骨側面に意匠的な抉り。
3	志羅山遺跡（第21次）	岩手県西磐井郡平泉町	溝から2本	12C後半	藤原氏一族あるいは高い地位の家臣居住か？
4	志戸田繩遺跡	山形県山形市	2本	鎌倉時代	
5	千葉寺経塚	千葉県千葉市			
6	鶴岡八幡宮境内遺跡（正覚院跡I次）	神奈川県鎌倉市	溝から6本	15C後半～16C初	
7	横小路周辺遺跡		井戸から5本	15C中頃～16C初	
8	諫訪東遺跡		方形堅穴建築址から7本骨の完存1点	13C後葉～14C前	親骨に赤色塗料の痕跡か？
9	今小路西遺跡		池から完存2点。 それぞれ5本骨と2本骨。	13C前半	有力武士階級の屋敷
10	北条時房・顕時邸跡		トレンチ？	13C中頃～14C前	
11	大倉幕府跡		整地層から3本	13C3/4	初期の御所
12	千葉地遺跡		井戸から1本。土坑から3本。	14C	寺院関連の遺跡
13	千葉地東遺跡		溝から7本。河川から8本。 包含層から14本。	13C～14C前半	
14	若宮大路周辺遺跡群 御成町868番地地点		包含層から13本	13C中頃～後半	
15	鶴岡八幡宮研修道場用地		溝等から13本	14C後半～15C初頭	形代等木製品多量に出土。
16	蔵屋敷遺跡		7本	13C1/4～14C1/4	
17	一之口遺跡東地区	新潟県上越市	溝から5本	11C末	要なし。形代が多数出土し祭祀的性格強い。
18	山岸遺跡	新潟県糸魚川市	溝から完存1点	12C後半	大量の木製品が共伴。板状木製品を突き立てた遺構を伴い祭祀的。
19	友杉遺跡	富山県富山市	谷	12C後半	
20	寺家遺跡	石川県羽咋市	落ち込み状遺構から6本	10C後半～11C前半	木皿、土師皿共伴
21	朝熊山経塚	三重県伊勢市	経塚 合計46本	12C後半	白木、黒色漆塗り、雲母付着、金箔など 装飾品多い。紙残存あり。檜、竹材など。
22	鳥羽離宮跡	京都府伏見区	溝から4本。池から3本。	12C～13C	スギ材
23	高尾山経塚（秋津村経塚）	和歌山県	経塚 3本	平安後期	地紙と骨3本残欠
24	草戸千軒町遺跡	広島県福山市	井戸、溝等から23本	13C後半～14C	面取りを施すもの、漆付着のものあり。
25	奈良原経塚	愛媛県			
26	太宰府史跡	福岡県太宰府市	溝から6本	11C後半～12C前半	
27	太宰府条坊跡X I（第50次調査）	福岡県太宰府市	井戸から5本	11C後半～12C前半	要なし、親骨外面黒色塗り

参考文献

- 青山 晃 2008「第V章まとめ」、「第VI章 考察 2 任海宮田遺跡における中世集落の動態」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅲ』富山県文化振興財団
- 朝田 要 2004「惣領浦之前遺跡出土の漆闕連遺物について—コップ形須恵器を中心に—」『富山考古学研究』第7号 財団法人富山県文化振興財団
- 網 伸也 1996「和製鋳型の復原的考察—左京八条三坊三町・六町出土例を中心に—」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 池野 正男 1988「射水丘陵における9・10世紀の須恵器窯跡」『大境』第12号 富山考古学会
1997「越中における9世紀代の土器様相」『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
- 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会 1988『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』
- 井上 尚明 1994「コップ形須恵器の考察—奈良時代の計量器について—」『考古学雑誌』第79巻第4号
- 内田亜紀子 2000「越中婦負郡の古代土師器煮炊具—中名I・V・VI遺跡の堅穴住居出土資料を中心に—」『富山考古学研究』第3号 財団法人富山県文化振興財団
- 宇野 隆夫 1982「井戸考」『史林』第65巻第5号
- 越前 慎子・高梨 清志 2007「富山県の様相」『中世前期北陸のカワラケと輸入陶磁器・施釉陶器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会
- 大野 英子 2003「第4章まとめ 3 婦負郡における古墳出現期の土器の変遷」『鍛冶町遺跡発掘調査報告』婦中町教育委員会
- 押切 智紀 2003「主な出土扇貝の集成（古代～中世前半）」『山形考古』33号
- 熊野郷土史編纂委員会 1989『熊野郷土史』
- 古代の土器研究会 1994『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3 施釉陶器—』
- 五島美術館 1998『日本の三彩と緑釉—天平に咲いた華—』
- 酒井 重洋・古川 知明 2008「越中国の様相」『北陸中世のみち』
- 島田美佐子 1996「第4章第8節 中世越中国の墓・墓地」『中・近世の北陸』桂書房
- 高梨 清志 2006「富山県の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』北陸中世考古学研究会
- 武田健次郎 2004「富山平野における古代基礎地域の再考」『富山考古学研究』第7号 財団法人富山県文化振興財団
2007「第2章 考察 2 墨書き土器について」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅱ』富山県文化振興財団
- 武田健次郎・青山 晃・内田亜紀子 1999「越中における須恵器貯蔵具の様相」『北陸古代土器研究第8号 つばとかめ』北陸古代土器研究会
- 田中 道子・宇野 隆夫 1989「第5章 考察 1 須恵器の編年と画期」『越中上末窯』富山大学人文学部考古学研究室
中世墓資料集成研究会 2006『中世墓資料集成—北陸編—』
- 富山県埋蔵文化財センター 1991『南中田D遺跡発掘調査報告書』
1993『小杉流通業務団地内遺跡群 第10・11次発掘調査概要』
- 富山市教育委員会 1998『富山市任海宮田遺跡試掘調査概要—県営公害防除特別土地改良事業に伴う試掘調査（3）』
1999『富山市友松遺跡・任海宮田遺跡試掘調査概要—県営公害防除特別土地改良事業に伴う試掘調査（4）』
- 難波田 徹 1990『日本の美術 第284号 鏡像と懸仏』至文堂
- 根津 明義 2002『中保B遺跡』高岡市教育委員会
- 北陸中世考古学研究会 2001『中世北陸の井戸』
- 細辻 真澄 2008「第VI章 考察 1 任海宮田遺跡出土の古代土器分布について」『任海宮田遺跡発掘調査報告Ⅲ』富山県文化振興財団
- 三島 道子 2001「黒河尺目遺跡の堅穴状遺構について」『富山考古学研究』第4号 財団法人富山県文化振興財団
- 森 隆 2006「富山県における古代末・中世の回転台土師器（資料編）」『富山考古学研究』第9号
財団法人富山県文化振興財団
- 森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 八峰 興 2001「柱状高台考」『中世土器研究論集—中世土器研究会20周年記念論集—』
- 山本 信夫 2000『大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編—』太宰府市教育委員会
- 吉岡 康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 四柳 嘉章 1987『西川島 能登における中世村落の発掘調査』穴水町教育委員会

報 告 書 抄 錄

2010（平成22）年2月25日 印刷
2010（平成22）年3月5日 発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第44集

友杉遺跡発掘調査報告

－公害防除特別土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告IX－
(第一分冊)

編集・発行 財団法人富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
〒930-0887 富山市五福4384番1号
TEL 076-442-4229

印 刷 富山スガキ株式会社
〒939-8585 富山市塙原23-1
TEL 076-429-3553